

ついでる

酪農家 吉川友二

足寄町の高台には戦後に開拓された広大な牧草地が広がっている。その開拓地は今の私達には到底考えられないような開拓者の努力によって拓かれた。その開拓者の後を継いで、二〇〇〇年の暮れから開拓地に移り住んで暮らし始めた。

農業を始めて十四年になるが、毎年うまくいくだろうかとドキドキして、新鮮な気持ちで農業をしている。いつまでも新規就農者の気分である。しかし、四十九歳にもなって「新規就農者です」というのは周りの人から見たらおかしいのかもしれない。今年からはドキドキと新鮮ではなく、ワクワクと新鮮な気持ちで農業をするつもりだ。毎朝おきると、「今日もワクワク冒険するぞ」と言うようにしている。

大きな電気屋さんに行くわけの分からない製品がいくつも置いてあって、時代に取り残された気分になる。そんな私も昨年、電子書籍を買った。すると電子書籍の細かい字がよく見えない。画面の質が悪いからだだろうと思った。数日後にふと気がついて、かけている近眼用のメガネを外すと画面の字が見えるのだ。無意識の中でも

なかなか老眼を認めたくなかったのだろう。とうとうそういう年になったのかという感慨を抱いた。余談ですが、年を取らない秘訣は自分の年は自分の好きな年に決めるが良いそうです。私の場合は二十八歳にしています。子育てが終わったら十八歳にするつもりです。

二〇一三年の五月十八日に、ありがとう牧場の十三周年と、「ありがとう牧場しあわせチーズ工房」の完成感謝会を開いた。ありがとう牧場とは、二〇〇一年に結婚をした千枝と決めた私達の牧場の名前である（それなので実際には十二周年である。十三年は私が足寄に来てからの年数である）。感謝会での挨拶では、ここまでの来ることが出来たのは「ゆうじ（私の名前）は大器晩成だ」と繰り返し言い聞かせて育ててくれた両親のお蔭であり、両親に感謝すると話した。そして、農家製チーズを作る工房がこの緑に広がる開拓地に十数軒も出来て、それを試食して回る観光客が集まってくるような農村が夢である。これから十二年後が楽しみだと話した。

感謝会のときに農業を始めてから今までを振り返ってみた。自分も大分成長したなと思った。この年になってこれだけ成長できるとは思ってもみなかった。物事をくよくよと心配することがなくなり明るくなった。今までだったらいライラすることがあってもいライラしなくなつた。自分や家族や人に少しはやさしく出来るようになった。

たと思う。

年を取ってからの自分の成長に驚いたのは、子供の時から大人はすでに人間が出来上がっていて成長しないものと思い込んでいたからだ。小さい子供は、大人は絶対で正しいと思っっているの、周りの大人の言動や価値観などを疑わずに正しいと思ひ込んでしまう。大人になっからはその思ひ込みがあることさえ意識することがなく生きているのだと思う。

その人の普段のあり方は、子供の時に受けた周りの大人の影響以外に、その人が持つて生まれてきたものもあるだろう。自分の四人の子供たちを見てみると、個性はバラバラで、二歳にもなると、これはすごい、これは自分にもかないませんと思われされることもある。生まれたときに人はすべてを持つて生まれてくるのかもしれない。

こんなことがあった。大学を卒業して帰省している時に、図書館へ行った。図書館の貸し出しのカウンターにいた女性に「まあ、ゆうちゃん（ゆうじでゆうちゃん



ありがとう牧場でフィールド学習会

んと呼ばれていました）でしょう。幼稚園の時とちつとも変わらないに「に」というのは長野の上田の方言で語尾につきます」と呼びかけられた。自分は髭も生やしているし、すっかり一人前の大人になつたつもりでいたので、ちよつとシヨックだつた。しかし後で考えてみると、子供の時と大人になつた今と変わらないで成長できたということだ。これはこれで心強いことだ。



大空と大地の中に大ぜいの若者が集まる

農業を始めた頃は無我夢中で仕事をしてよく笑いもしたが、天候のこと、牛のこと、日常の些細なことでも何かと心配も絶えなかつた。懸命に働いてストレスなどと意識する余裕もなかつたが、大きな借金をかかえ、多くの生き物の命をあずかる仕事をするのは、当時の自分にはかなりのストレスだつたのだと思う。自然と自分と同じように新しく事業を始めた経営者の書いた本を読み始めた。経営者の書いた本はお金儲けのための本であると思つてそれまで読んだことがなかつた。お金儲けのために生きることは悪いことであると思ひ込んでいた。しかし松

下幸之助さんや稲盛和夫さんの本を読み、自分の利益だけではなく会社に関わるすべての人や世の中の利益を考える経営者の姿に感銘を受けた。余談になるが、自分の小さい時の夢は獣医さんになってアフリカの動物を助けに行くことだったと小学二年生だった次女に話すと、「おとうちゃん、



熱心に耳を傾ける酪農関係者

そんなの簡単だよ。いっぱいお金を儲けて寄付をすればいいんだよ。」と言われた。

そのような経営者の中でも斎藤一人さん（日本で累積納税額が最高の商人）の本（『変な人の書いた成功法則』）他の経営者の書いた本とは全く違っていた。一人さんの本を読んでみると、ところがスツと軽くなった。他の著者は偉すぎて読むと自分がダメ人間に思えてくる。一人さんの本を読んでこういう人になりたいという気持ちにさせられた。偉い経営者ではなく、楽しい経営者の姿に目からうろこが落ちた。

一人さんは難しいことはいっさい言わない。一人さんが言うには、人は幸せになるために生まれてきた。幸せ

になることは我々の義務である。自分が幸せになれば少なくとも一人は地球から不幸な人がいなくなる。そして幸せに成功するためには、顔につやを出す、光物を身につける、天国言葉（ところが明るくなるような言葉）を使うことの三つである。その天国言葉の中に「ついでる」がある。そして常に「ついでる、ついでる」と繰り返して言う口癖にすることが大切である。

「ついでる」という言葉とは忘れられない出会いがある。足寄に来たときに独身であった私は、牧場で実習をしている女性を紹介された。彼女と二人で話している時に「わたしがついでる」と彼女が言った。まだ一人さんの本と出会う前の話である。私はどうして自分ばかりこんなに苦勞をしなければならぬのだろうかと思う方で、子供の時から自分がついでると思ったことなどなかった。「何だこいつは。こんなやつもいるんだな」と驚いた。その女性とは三回会っただけで翌年に結婚することになった。

「ついでる」という言葉と次に出会ったのは、松下幸之助さんの話を知人から聞いた時だ。松下さんは創業した頃の就職試験の面接で「あんたはほん ついでまっかー」と尋ねて、「ついでます」と答えた人だけを採用したらしい。「何でそんなことを聞くのか」と聞かれた松下さんは「ついでる人が集まればついでる会社が出来て、つ

いてない人が集まったらついていない会社になってしま
う」と答えたそうだ。

「ついてる」という言葉と出会ってしばらくして、「つ
いてる」という言葉は、今あるのは自分ひとりだけの力
ではないのだという、周りの人たちや自分を越えたもの
への感謝の言葉だということに気がついた。妻となって
くれた女性は「わたしがついてる。今の職も全く就職
活動もしなかったけれど、先生が紹介してくれたし」
「わたしはどこへ行っても大丈夫」と言っていた。

ありがとう牧場の感謝会の後、一人さんの本に付いて
いたCDを聴いた。「ついてる人は努力家だ」と話して
いた。一人さんに言わせると、ついてる人というのは、
「車が追突された時に、まず痛てーなーこの野郎と思う。
そしてその後この程度で済んで俺がついてるな、と
言う人がついてる人」だそうだ。普通の人がこの野郎で
終わってしまう所を、その後「ついてる」と言う努力
をしていることになる。だから「ついてる人は努力家」
という訳だ。

自分も成長できたのは、努力しているつもりはなかつ
たが努力をしていたからなのだ納得した。昨年『噴
煙』にも書いたが、無限小の生長するスピードでアスファ
ルトを押し上げ、アスファルトを突き破ってしまう雑草
と同じである。生長を急ぎすぎるとかえってアスファ

ルトにぶつかって折れてしまう。努力をしているか分から
ないほどの努力の積み重ねが人を成長させるのだろう。

人生の中でもどうしても「ついてる」と言えないことが
起こるが、そういう時は「わけがわからないほどついて
る」というのだそうだ。「ついてる」と繰り返す言うの
は、何かあったときにとっさに「ついてる」と言えるた
めだと一人さんは言っている。自分も「ついてる」と言
い始めて何年もかかって、ようやく最近何かあったとき
に「ついてる」と少しは言えるようになった。

「ついてる」とバカみたいに繰り返して言っていたせい
だろうか、就農当時に比べて、日々の幸せ感が高い。一
人さんの言葉に「一度幸せになった人は二度と不幸せに
なれない」という言葉がある。脳科学者の茂木健一郎氏
の訳した『脳にいいことだけをやりなさい』（三笠書房）
という本によると、幸せとは脳の幸せ神経がどれだけ活
性化されているかで決まり、現実には何が起きるかで決ま
るわけではないそうだ。この本は一人さんの言っている
ことを科学的に説明しているような本でありお勧めの本
だ。「ついてる」と繰り返しいうことによって、脳の中
の幸せ感をつかさどる神経回路が活性化されるのだろう。
そしてその本によると一度その幸福神経が活性化されて
しまうと、何かあっていったん幸せ感が下がっても、ま
たもとの幸せ感のレベルに戻ってくるのだそうだ。

「ついでに」と繰り返し言っていて、ほんの少しずつ幸せ感が高まってきた。そして自分の幸せ感のレベルが上がると現実にも良いことが起きるようになってきたのではないかと思える。脳細胞が変化をすると、現実にかきることが変わるのではないだろうか。

なぜ現実にかき起こることより、脳の状態が先なのだろうか。それは幸せな状態の脳は、幸せを呼び寄せるような正しい知恵が湧いてくるからではないだろうか。脳の状態が違えば、同じ現実でもそれに対する感じ方や、色眼鏡をかけたように現実の見え方まで違ってくる。見える現実が違えばそれに対応する行動も湧いてくる知恵も違ってくるだろう。その積み重ねで日常に起こることが少しずつ変わってくる。そしてこれが何年も積み重なると大きな違いを生み出すことは当然と言える。

有名人のお話を聞いたり読んだりすると、人にだまされたりして苦勞の連続という人がいる。失礼だがその人たちに共通しているのは、他人が悪くて自分は悪くないと思っっていることだ。自分にもどこか問題、責任があるのではないかという視点がないように感じる。少なくとも今の心の状態は自分の意思で選ぶことができるわけだから、自分の責任である。「ついでに」と言うのは何があるうとも、幸せな心の状態を選び取るぞと言う決意宣言であろう。「ついでに」という言葉は、人や自分

を超えた存在に対する感謝の言葉であると書いたが、何がうまくいかない時は感謝が足りていないのかもしれないと考えるようにしている。まずは自分のために一番頑張ってくれている自分に感謝である。

私は一人さんに出会うことができている。まだまだ未熟だが、これは伸び代が大きいということである。「ゆうじは大器晩成なのだ」ということでまだまだワクワク生きていけそうだ。

農業を継いだ若い人が、仕事をしていても楽しくないと言っているのを聞いて残念に思った。自然を相手にしている時には過酷なことがある。朝起きると大雪が積もっていて大変だったこと、台風が来て木が倒れて牧道がふさがれてしまったこと、冬の夜の牛の見回りで体が冷えてなかなか眠れなかったこと（こんなことは夜の見回りは厚着をすれば解決するのに当時は思いつかなかつたのだから不思議だ）など良く覚えている。悪いことはとても印象に残るので、いつまでも忘れないでいるために農業は大変だと思ひ込んでしまう。それに加えて世間の人たちまで農業は大変だと言ってくれる。しかし考えてみると実際には一年のうちほとんどは、なにも起こらない平穩無事の毎日なのだ。生命を育てられる大自然の中で豊かさを与えられて毎日を生きている。牛を見ていると自分の食べ物の草の上で生きている。ミミズは

自分の食べ物の中で生きていく。人間も大して牛やミミズと違はないのではないかと見えてくる。農業は最高に「ついでる」仕事である。

足寄開拓農協の三十周年記念誌である『硬骨の賦』を頂いた。この本には贈り主からの「この豊かな大地 戦後開拓者から 平成の開拓者へ託す」という言葉が添えられていた。本の巻頭文には「ただ、聊か心懸かりになることは、建設の途を急がなければならなかったあまり、精神財、すなわち文化の蓄積に力及ばなかったことである。これからは、荒々しい開拓はなくなって内的建設の期に入るのであるから、文化の焔をより高く掲げてほしいものである。」と書かれている。

同じ本に開拓農家の方が「開けゆく 緑の大地見るにつけ 人の力の尊さを知る」と詠んでいる。

まずは自らの心の開拓を楽しみ、農村文化の花を開かせるために楽しく知恵を出して行動していきたい。

追記 自分の年は自分で決めると良いという話。子育ての最中だから今は二十八歳で、子供の教育が終わったから十八歳にすると友人に話をしたら、「十八で子供が出来たと思えばいいんだ」と言われました。自分の脳みそは自分の都合の良いように使わなければなりませんね。感動しました。

父のことなど

父は電線に塗料を塗る工場で働いていた。子供の頃、見たこともない家電製品や食べ物を父が家に持って帰って来るたびに歓声をあげた。二つ上の兄と両親との四人暮らし。六畳二間に狭い台所がついた古い家に住んでいた。

私は活発でお調子者であったが、繊細で感じやすかった。何かあると興奮したり、くよくよ心配したりして、なかなか眠れないことがあった。隣で起きている両親の明かりがふすまの隙間から差し込んでいく。両親に眠れないとしくしく泣きながら起きていく。父が膝に抱いてくれて、「ゆうじは大器晩成だ」と言い聞かせてくれる。「大器晩成ってなあに」と聞くと、「大きな人間は小さい時から立派ではなくても、大きくなってから成長をするということだ」と教えてくれた。子供の自分は身長のことだと思っていた。あるときには普段歌などいっさい歌わない父が、「ケセラセラ なるようになる あすのことなどわからない」と慰めてくれた。

去年のお正月に町の商工会の福引に家族で行った。みんなはハズレだったのに、私だけが二つも当たりくじを引いた。くじ運がなく、いつもはくじ引きは我が家の女性に任せていた。今年は当たり年だと家族のみんなに言っ

ていた。二月に美瑛で開かれる宮様スキー大会の交歓会でも景品が当たった。テレビの取材も二月、五月に二回、六月、八月、九月と、計六回もやって来た。

日記を見返してみると、よくもこんなにぎゅちりといろんなことをしたものだと思う。そんな日々の中で父の体調がよくないという連絡があった。一緒に働いてくれたいた兄が実家の長野県の上田に帰ったのは七月八日、最後になる一番草を刈り倒した翌日である。生まれて初めて飛行機に乗るといふ兄を早朝に帯広空港まで乗せていった。

中断はあったが、兄は二年近く牧場で働いてくれて、一緒に生活をした。兄と生活をしていると、時には兄のちよつとしたことに感情的になっている自分に気づくことがあった。子供時代の感情が戻ってくる。兄と大人になつてから過ごした日々は少年時代に戻つたような貴重な時間だった。

長男が次男の遊んでいる所にちよつかいを出す。弟は「おとうちゃん。おとうちゃん」と大声を出して、何とかしてくれと私のところに訴えに来る。そういう時は辛かされて、親に何とかしてくれと大騒ぎをした。そのときも両親は何もしてくれなかった。そういう時の親の辛さがよく分かる。どうしたらよいのだろうか。ここで長男

をしかつて止めさせても何の効果もない。長男のころを少しづつ満たしてあげて、信じて待つしかないと黙って見ているだけだ。

空港へ送っていく途中の車の中で、兄に前から気になっていた話を初めてした。夕御飯が終わつて父が柱に背をもたせて座りくつろいでいる。私は小学校の低学年くらいだろうか。座っている父の肩に立ち上つて柱時計をいじっている。その柱時計が落ちて柱時計の角が父の頭に当たる。父は頭を抱えてころがって、痛がっている。物事に動ずるところを見せることがなかった父がこんなに痛がる姿を初めてみた。

「そのときも怒らなかつた、お父さんは何があつても怒らかつたよね。怒つた所をみたことがない」というと、「柱時計を落としたのはおれだよ……。それに友二にちよつかいを出して、結構怒られたよ」と兄が応えた。

自分が父の肩に乗つて時計をいじつていて、時計が落ちていく所をスローモーションのように覚えている。少しの間、言葉も出なかつた。

父の仕事着は塗料のツンとする臭いがしていた。その臭いが好きだった。父の臭いを懐かしく覚えていた。小学校へ入る前だつたらうか。夕暮れ時。父がいつもの時間になつてもなかなか帰つてこない。薄暮の中、外へ様子を見に出かけると、コート姿の父がむこうから歩いて

くる。「お父さーん」と大声を出して走って行って、飛び跳ねて胸に抱きついた。抱きついてから人違いに気がついた。

これだけ熱烈に愛情表現をする子供だったので、父もかわいかったに違いない。私も長男が悪い事をしたときは叱ってしまい。次男が同じことをしても腹が立たない。そして長男に対して感情的になってしまったたびに、一度も怒らなかつた父は偉かつたな、と反省していた。下の子が生まれて十分に甘えられなかつた長男と、父親大好きの子供と父親。関係を単純化しすぎているが、それを子供の時も親になつた今も経験している。

実家へ兄が向つたその日、父の入院が決まつたとの連絡が来た。父は肩が痛くて夜も眠れなくなるまで病院へ行くことを我慢したそうだ。そして病院へ行くとすぐに検査入院になつた。母によると父は生まれてから健康診断もしたことがないほどの病院嫌いであるそうだ。

兄が帰つてから一週間も経たないうちに父の容態が悪くなつたと連絡が来た。自転車の大会へ出る予定で搾乳ヘルパーを頼んであり、飛行機のチケットもすぐに取れたので七月十九日の最終便で帯広を発つ。深夜に上田に着いて、駅から歩いて十五分の実家までの道を歩くと、ふるさとの夏の夜の肌触りがした。

父は腎臓ガンだそうだ。入院した時には元気に病院内

を歩き回っていたそうだが、検査入院中に誤飲をして肺炎になつてしまい、ベッドに寝たきりになつてしまった。病院嫌いの人は検査だけして入院をしないで家に帰ることのできる仕組みがあればよいと思つた。

私がお見舞いに行つたその日、看護士さんが歩く練習をしましょうと、ベッドから抱き起こして、一緒に肩を組んで歩いた。しかし足に全く力が入らずに五、六メートルを歩いてまたベッドに帰つた。翌日はまた歩く練習をするので上靴を持ってきてくれと看護婦さんに言われたが、父が歩く練習をしたのはこれが最初で最後だつた。

数年前に脳卒中になつてから、しゃべるのが聞きとりづらくなつていた。病床で熱心に話しかけてくれるのだが、かすれて全く聞き取れない。よく分からずにもどかしいが、何度もうなずく。私は今までの感謝の気持ちを恥ずかしがらずに伝える努力をした。

寝たきりの父を見たら、出来るだけ父のそばにいてあげたいと思つた。自分がそうなつたら、病院ではなく子供と出来るだけ一緒に過ごしたい。愛する子供たちの顔を思い出すだけで励まされる。出来れば足寄に連れて帰つて孫達のいる所で看病したかった。意思を伝えられるうちに、どのように死を迎えたいか伝えておくことの大切さを知る。孫達の写つた写真やDVDが見られるように、小型DVDプレーヤーをプレゼントして帰る。そのDV

Dプレーヤーは今、私の家にある。

七月二十四日、妻の千枝の祖父が亡くなったと連絡が来る。翌朝の七時に足寄を出て富山の黒部の実家へ家族みんなで通夜に出る。次の日の告別式には、上田から母が電車で来る。父の看病を兄に任せて、孫達の顔を見にきた。暑い日だった。祖父は黒部市の男性の中で最高齢であった。

子供たちの夏休みになって家族みんなで帰省をした。夏休みを利用した帰省は初めてだった。祖父の新盆を済ませて、北海道では寒くて楽しい海水浴を楽しむ。暑くて海岸の空気が白く見えた。まだそのときの日焼けの後が残っている。

その後上田へ行って家族全員では初めてになる父への見舞いをする。保育所年長さんの末っ子の三男は、父のあまりにも変わってしまった姿を見て手も握れなかった。すっかり痩せてしまい、寝たきりになってしまった父に私もショックを受けた。七月にお見舞いに来た時にはまだ回復する望みを持っていたが、父の姿を見て、遠くないうちにお別れがくることを覚悟した。

夜は家の近くの神社で子供達と盆踊りを踊る。私の子供の時は境内に人があふれかえっていたが、やぐらの周りに二つの輪ができるのがやっとで、子供は十数人しかいなかった。

秋になり二番草が雨でなかなか刈れずにいるなか、九月六・七・八日の週末に小学校五年生の長男と二人でお見舞いに帰る。行きの飛行機の中で父のことが思い出されて、涙があふれて止まらなくなる。予想もしていなかった涙に戸惑う。野球、サッカー、スキー、スケートから、独楽回し、ツルを切つてターザンごっこ、崖で泥すべり、川遊びなど一緒に遊んだ思い出がいっぱいだ。私の欠点や悪い所を含めて認めてくれていた。父を思つてこれだけ涙を流したのはこの時だけだった。

お見舞いの他に、長男を連れて上田の北にある太郎山に登る。幼き日に父と何度も登った思い出の山である。長男が途中でもういやだと半泣きになるのをなだめすかしながら登る。

帰る日は朝から雨が降っている。二番草が終わったらまた孫を連れて会いに来ることを約束して笑顔で別れる。帯広に迎えに来てくれた家族と次女の誕生日を祝った。翌日の朝から二番草を刈り始めることが出来た。

草を刈り倒しながら、父が亡くなることを考える。父と離れていて何もしてあげることが出来ないの、トラクターに乗りながら父のことをあれこれと考えてしまう。離れて暮らしているので、父がいなくなってしまう。今までと全く変わりはしない。今のこの時間が、父が生きている時間か、いない時間かの違いだけである。あれ

これ考えるよりも、父が生きているという限られたこの時間をしっかりと心に刻んで生きようと思う。

九月十九日には一番草を終えることが出来て、二十一・二十二・二十三日の土曜、日曜と秋分の日を利用して、今度は次女と次男を連れてお見舞いに行く。足寄はすっかり秋が深まってきたが、上田へ着いてみるとまだ夏だ。

上田の街は住宅が密集しているので、北海道に長く住んでいる感覚からすると、狭い道が廊下で家々が部屋であるような錯覚に陥る。上田は真田昌幸が築いた城下町である。昌幸の長男の信之は徳川方について真田家を後世に残し、昌幸と次男の幸村は豊臣方について幸村は大阪夏の陣で死んでいる。彼ら三人の間にも、同じような親兄弟の関係があっただろうか。

病院は実家から三キロメートルほどの距離である。城下町の中心を通ってお見舞いへ行く道すがら探検をする。太郎山のふもとにある病院の手前には海禅寺、星蓮寺、上田大神宮、八幡神社と町を囲むように並んでいる。寺社もお城の防御のために城下町の外縁に配置されたのだろう。街なかを歩いていると観光バスから人が降りて歩いていくのが見える。ついて行くと、昔の町並みが復元された通りがあった。お見舞いに行くときにはいつも違う道を通った。お見舞いをして、太郎山に登って、父と釣りをした思い出の池に釣りに行って、一日中子供達と

歩きまわった。今度は一番下の子供をつれてくることを約束して別れた。

保育所の年長さんの末っ子を連れて十月七・八・九日の平日にお見舞いに帰る。三男と病室へ入ると父は孫にすぐに気がついて満面の笑み。今まで見せてくれた笑顔の中で最高の笑顔だったので驚く。今度は三男をつれて帰ると言った事を覚えていたのか、三男を連れて来ることを母が事前に父に伝えておかなかったからだろうか。

その後はほとんど目をつむっているが、我々に気がつくこと笑ってくれる。苦しむことなく、子供の時の私や孫達と遊んでいる夢をウトウトと見ていてくれたらどんなに幸せなことか。私が就農をしてからは父と母は牧場が分婉シーズンで大変な三月に、小さかった子供たちの面倒を見るためと牧場のお手伝いに毎年来てくれた。私の知らない孫達との思い出もたくさんあるに違いない。

十月十三日には牧場から見える東大雪山の峰峰が真っ白くなった。十六日の早朝、父が亡くなった。その日は朝より台風が来ていた。夕方にはみぞれに変わり雪が積もり始めた。雪で放牧草が食べられなくなるので、乾草を放牧地に撒いたり暗くなるまで明日からの不在に備えた。

翌朝、三時半に家を出て、車で千歳へ行く。午後三時半に上田に着いて、四時からお通夜。お通夜が済んで、

葬儀場の二階の部屋で兄と一緒に父との最後の夜を過ごす。特に暑かった今年の夏も終わり秋らしくなっていた。

病院嫌いだっただ父。夏から秋へと三ヶ月以上もの長い間頑張ってくれてありがとうございます。すべての孫をあわせに連れて行くことが出来ました。最後の親孝行と思いい出作りをさせてもらいました。

告別式の翌日は夏に盆踊りをした大宮さんのお祭りがあった。孫達を父がお祭りに呼んでくれたのかと思う。境内が歩けないほどの人ごみであった自分が子供の時のお祭り比べてガラんとしたお祭りであった。二十日の日に次男の誕生日をみんなで祝って帰る。

父の四十九日は一人で行こうかと迷ったが、家族全員で行くことにする。十一月二十九日の小学校の授業参観が終わってそのまま帯広空港に向った。上田でもストーブをたかないとかなり寒い季節になっていた。

四十九日の昼食を母と兄と私の家族で頂いて、お墓に父の骨を納めにいく。骨壺から骨をお墓に移すときに、お墓に入る手前で崩れて落ちた父の骨を見て、七十八歳まで生きたが、もつともつと生きたかったのだなと思う。人はどんなに長く生きてももつともつと生きたいし、どんなに長生きしても人の死はかなしいものだ、と当たり前のことにいまさら気がつかされた。

父のお見舞いで足寄と上田を行き来する交通機関の移

動の最中に、『御冗談でしようフアイマンさん』を読んでいた。お見舞いに家を出る慌しい中、なぜか学生の時に買って読まないでいた本を手にとった。ノーベル物理学賞を受賞したアメリカ人の書いた自伝である。その中に子供の時のお父さんとの思い出話を書いてあった。お父さんが人間はなんのエネルギーで動いているのかと尋ねる。二人は太陽を指差す。太陽のエネルギーが植物の光合成で取り込まれ、それを食べた動物達が植物をエネルギーに変換して動いている。生きとし生けるもの、機械でさえも本を正せば太陽のエネルギーで動いている。

今は夏の日差しから、すっかり冬の日差しに移り変わってしまった。我々はお日様の光で出来ている。すべての人が光りを放って生きている。みんなお日様の子供たちだ。父が病床で熱心に話しかけてくれたことは聞き取れなかったが、父のこの世でのお日様の役割は引き継がれている。

納骨が終わって、レンタカーを返すついでに、兄が子供達を連れてドライブにでかけてくれる。

上田の文化と歴



親子で自転車による日本一周を始めた。去年の沖縄に続いて今年は九州を走った。

史を子供たちに見させてあげようと、生島足島神社（いくしまたるしま）へ行く。そこから子供の時に父と母と自転車で何回か行って楽しかった思い出のある鴻巣（このす）へと兄が足を延ばしてくれる。小石が堆積して出来た丘が侵食されて小石の崖が出来ている。小さい時にあきずにこの崖を登ったり滑り降りたりした。子供の時は大きな山の崖に見えたが、すっかり小さく感じられた。私の子供たちの目にはどのように見えただろうか。大人になったからか、上田のものは何もかも小さくなったように感じられる。しかし山の傾斜だけは急になったように感じられるのが面白い。

日が翳ってきた。車が一台やつと通れるくらいの細い峠道を鴻巣から須川湖へ越えていった。兄が小学生の時に遠足で行って、その後、その後に家族のみんなを案内して来たことのある思い出の道だそうだ。

須川湖は小さい頃にスケートをしに家族で何時間もかけて歩いてきた湖だ。湖畔に車を停めて外へ出たが、切り立つ山に挟まれて、湖は道からは



九州旅行の帰りに東京駅で母と

ほんの少ししか見られなかった。ここから奥へと湖は広く広がっていたのだろうか。寒くなってきた薄暮の道を母と妻の待つ実家へと車を急がせた。

最後になるが、たびたびの留守を預かってくれた新規就農を目指している従業員瀬古君と妻の千枝に感謝します。瀬古君のお蔭で安心して父に会いに行くことが出来ました。ありがとうございます。

『稚内からサハリンまで』

足寄建設業協会会長 斉藤健司

『新党大地研究会inサハリン』

九月十七日、鈴木宗男さんと娘の貴子さん及び『新党大地』秘書団、全道の後援者団体、足寄から私を入れて三名、総勢二十三名でサハリンに行ってきました。三泊四日の日程です。我々三名は前の日稚内に前泊し、前祝と称して軽く一杯『稚内副港にある屋台村、波止場の一角にある『鉄板焼き正ちゃん』この店は年の頃なら四十五歳（？）と言う感じかな、なかなか乗りのいい女将さん一人でやっている店でした。我々三人が先に一杯飲んで機嫌よくなってきた頃、地元の漁師さん風の若いもん二人、それから三十分後に二人づれの中年男女？どう